



人文学部教授
山田雄司

やまだゆうじ
博士(学術)
専門分野は、日本中世史、信仰史

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
<http://onryo.syuriken.jp/>



伊賀忍者の手裏剣(伊賀流忍者博物館所蔵)

日本人とは何か、 歴史を通じて考える。

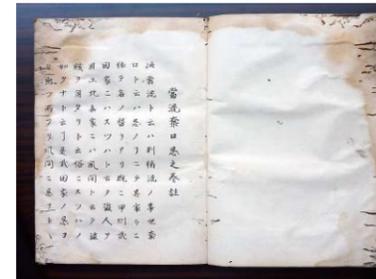
日本人は何を考え、どのような暮らしをしてきたのでしょうか。人文学部では、中世社会の信仰から忍者まで、近年、関心を集めるようになったテーマに早くから着目し、日本史の分野から、具体的な史料に基づき、これまで歩んできた日本人の営みについて研究しています。

怪異に対する日本人の信仰

我々はこれまで怨霊・怪異といった側面から日本史の研究を行ってきました。そこには、自然の背後に神を感じ、畏怖してきた日本人の姿がありました。日々巻き起こる災害や怪異、病の原因は何なのか、それがわからないときに人は不安となり、恐怖を感じます。日本の中世社会においては、怪異が発生するとそれが朝廷に報告され、どのように対処すべきか前例が調べられ、議論がなされました。それでも解決がつかない場合、神祇官・陰陽寮に命じて卜占という「科学的」手段によって神意を読みとることが行われました。卜占の結果はパターン化されていますが、怪異発生の原因が突き止められ、神社への奉幣を行うといった対応がなされることにより、得体の知れない怪異に説明が付されて人々の不安が取り除かれていったのです。日本は「神国」であったため、非常事態が発生した際には神の意向が確認されました。こうしたことは形態を変えながらも、国家から庶民に至るまでおこなわれており、言うならば神仏の加護なし



伊賀流忍者博物館



忍術書『楠流忍法奪口忍之巻註』



※川上仁一社会連携特任教授
約500年前から伝わる忍術を受け継いだ甲賀流伴党21代目宗主。現代に生きる「最後の忍者」とも呼ばれ、三重県伊賀市の「伊賀流忍者博物館」で名誉館長も務める。2011年12月、三重大学社会連携特任教授に就任。

では社会が成り立ち得ませんでした。日本史においてはこのような研究は一昔前までは等閑視され、まともに論じられてこなかったのですが、今では前近代社会を分析する上で欠かせない視点となっています。

地域連携による伊賀忍者の研究

我々はこうした日本人の信仰に関する研究を行ってきましたが、今年度、地域貢献の一環として三重大学と上野商工会議所・伊賀市との協定が締結され、伊賀連携フィールドが立ち上がったのを機に、主たる事業として忍者研究を行っていくことになりました。そこでは忍者・忍術学講座が開講され、忍者関連の古文書の講読、忍者文献データベースの作成などが計画されています。伊賀忍者と言えば、誰でも一度は耳にしたことがあるかと思いますが、その実態はよくわかっていません。そして、我々が持っている忍者のイメージもさまざまなのではないのでしょうか。ある人は忍法を使ってドロンと消えてしまう忍者を、ある人は水の上を歩いたり塀を跳び越えたりする忍者を、またある人は武術を使う存在としての忍者をイメージするなど、実態がわからないからこそ多様な忍者像がつけられてきたとも言えます。忍者像の変遷は、それ自体とても興味深い研究テーマです。これまでも忍者に関する研究はさまざまにされてきたのですが、日本史研究の方面からは、信頼するに足る史料がないとして無視され、まともに取り上げられてきませんでした。しかし、近年においてはさまざまな資料が発掘され、日本史研究の面からも実証的研究が行われつつあることは、今後の忍者研究の伸展を感じさせます。

忍者・忍術関係の書

忍術書と言えば、いわゆる三大忍術書『万川集海』『忍秘伝』『正忍記』の、とりわけ火器・水器といった「派手」な面ばかりが注目され、他の忍術書はほとんど顧みられてきませんでした。伊賀市の伊賀流忍者博物館には沖森文庫・藤田文庫といった忍術関係の文庫があり、そこにはまだ紹介されていない忍術書が多数あります。現在、翻刻作業を進めている『楠流忍法奪口忍之巻註』では、どのようにして情報を得たらよいのか、忍び入る際にはどのようにしたらよいのかといったことが詳細に記されており、実際はこうした「地味」な忍術の方が実用的だったと思われます。また、伊賀者の由緒について記した『伊賀路濃知邊』では、本能寺の変により徳川家康が堺から三河に帰る途中の伊賀越えの際に、伊賀者200人が御供して守ったことがその姓名とともに記されています。さらには、伊賀者はその後の数々の戦いにおいても家康の手下となって尽力したため、江戸に領地を与えられたことが詳しく述べられています。今後はこうした忍術書や由緒書に記された内容について、一つひとつ確認していく作業が必要となってきます。

世界に向けて「NINJA」を発信

映画やアニメ・ゲームなどを通じて、今や忍者は「NINJA」となって世界中にその名が知れ渡っています。しかし、忍者・忍術は学問の俎上には載せられてきませんでした。それを学術的に解明していこうというのが今回のプロジェクトであり、人文学部の教員をはじめ、「現代の忍者」である川上仁一社会連携特任教授*や伊賀上野観光協会などさまざまな方々や機関にご協力いただいて研究を進めていきます。三重大学および伊賀が忍者・忍術学研究の中心となり、世界への発信基地となるよう、研究成果についてはホームページなどで漸次お伝えしていきますので、どうぞご期待下さい。